

## 40年目の愛の選択

松本 侑壬子・ジャーナリスト

英語原題は「離れて、一緒に」。一見矛盾する、意味不明な言葉だ。だが、この映画はそれを描く。40年前、内戦で離ればなれになった夫婦。妻はその後、新しい家庭をつくり貧しくも平和な生活を送ってきた。そこへ、突然元夫が、はるばる台湾から上海に残してきた妻に会いにやって来た。一実話を基に中国と台湾の2つに分断された国の悲劇と、それが引き起こした夫婦の愛の悲劇を描く映画である。悲劇ではあるが、見終わった後の心の温かさはどうだろう。やはり、言葉とは一見、矛盾するような…。

中国は1949年、国民党が台湾に撤退して以来、長らく2つに分断されてきた。1987年に規制緩和され、少しずつ交流が可能になった。そんなとき、上海に住むユイアー（リサルルー）の元に一通の手紙が届く。40年前に国民党軍兵士として台湾へ行ったままの夫イエンションが上海に会いに来るといふ。だが、ユイアーには既に新しい家族がいた。幼子と2人取り残され、自殺まで試みたユイアーの命を救い、結婚し守ってくれた現夫シャンミン。二人の娘と娘婿、それに自身の連れ子の長男も。戸惑いながらもユイアーは、心優しいシャンミンの計らいでイエンションを温かく迎え入れ、ご馳走を用意し、寝床を整え、一家の客として精一杯もてなす。シャンミンは自ら市場に出かけ、決して豊か

ではない生活の中で上海蟹を気前よく買い、大家族の食卓を賑わしさえするのだった。

上海の言葉も風景もすっかり忘れ、異邦人のようになったイエンションは、ユイアー夫婦が購入したという建設中の高層マンションを見学しながら、ついに本音をもらす。「実は、君を台湾に連れて帰ろうと思って来たんだ」と。イエンションが去った後、残されたユイアーの人生は苛酷であり、彼女をめとったシャンミンも出世の道は閉ざされた。イエンションの告白を聞いたユイアーは、「生きるのに精一杯で、やっとここまで来た。幸せだったのは、あなたと暮らしたときだけ」と言い、「一緒に行きたい」思いは涙となってあふれる。

だが、命の恩人である夫シャンミンはどうなる？ 家族は？ 食卓を囲んだ娘たちは口を揃えて大反対、娘婿は金で解決を提案し、長男は無関係と背を向ける。ただ一人、肝心の夫シャンミンは、これは金や議論で解決できる問題ではなく、ユイアーは誰を愛しているのか、が鍵である（その答えは、自分が一番わかっていた）として、「君の気持次第。君がいいと思うようにすればいい」と潔い。悩み抜いたユイアーの選んだ、平凡に見えて平凡でない選択とは――。

3人それぞれにのっぴきならない望みを抱えてはいるが、決して攻撃的や戦略的にならないのは、大人の知恵か。礼節を知る者同士―と感じさせるのは俳優たちの品格であろう。

ワン・チュエンアン監督の前作「トゥヤーの結婚」では、美しいヒロインは生き抜くため、病身の夫を抱えたまま再婚の申し込みを受け入れた。その非常識とも言える愛の激しさこそ、本作のユイアーの「一見矛盾し、意味不明」に見える愛の選択に通じるものだ。

### 『再会の食卓』

中国映画（96分）／ワン・チュエンアン監督

2月5日TOHOシネマズ シャンテ他全国順次公開

